

東京外国語大学若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム(ITP-AA)
2009年度 派遣報告書

報告者：幸加木 文

2009年度の本プログラムによる派遣者として、イスタンブル・ビルギ大学欧州連合研究所のアイハン・カヤ教授および、ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院(SOAS)のジョージ(ヨルゴス)・デデシュ博士に受入教員をお引き受けいただき、現代トルコにおける国家の正統性とイスラームという研究テーマで、トルコと英国にてそれぞれ7カ月、3カ月の在外研究を行った。活動内容から本派遣期間を以下の3つの時期に分けて報告する。第1に、2009年5月から9月までの約5カ月の、オランダ・ライデン大学で開催された国際ワークショップにおける口頭発表(8月28日)に向けた準備とそのまとめ期間、第2に、同年10月から11月30日までの約2カ月のトルコにおける調査期間、第3に、同年12月1日に英国に移動してから2010年2月28日に帰国するまでのSOASにおける研究期間である。

はじめに、第1の期間には、イスタンブル・ビルギ大学の図書館およびイスラーム研究センター(ISAM)の図書館を利用し、必要な文献を電子的、物理的に入手し、英語論文の執筆を行った。ライデンでは、Political Influence of Religion-based Civic Movements in Turkey: The Case of Gülen Movementという題目で口頭発表を行った。その後のプロシーディングスのための原稿修正を含めた一連の過程では、明瞭な英語を書き話す能力を日々磨く必要を痛感した。また同時に、この時期のトルコでは、政権与党である公正発展党とイスラーム知識人・団体の撲滅を画する政治社会的に影響の大きい事件が起きており、研究対象も名が挙がっていたため、連日の報道をインターネット、新聞等でフォローし、事態の推移の把握に努めた。こうした事態をはじめ、いわゆる世俗派、宗教的少数派であるキリスト教徒やアレヴィー派など、世俗主義を軸とした諸問題が様々な機会に表出する現代トルコにおいて、その社会的な受容や感受性を現地で観察することは、問題の諸相を通時的に把握し文献によって裏付けていく際に、誤読をせず読解していくための素養になると考えている。この点を意識しながら情報収集し、トルコ人の知人たちと意見交換を行った。

次に、第2の期間には、トルコで入手すべき資料を可能な限り渉猟、収集しつつ、研究対象団体の主催する講演会への参加や学校訪問、団体の責任者へのインタビュー等を行った。11月に行った学校訪問では、メディアから逆風を受けている時期に調査した影響が若干見られ、質問のセンシティブィティについての認識や配慮不足を実感した。

第3の期間には、SOASのデデシュ先生より、オスマン朝・トルコ共和国期の文学史、言語学、トルコ・ギリシア/バルカン諸国間外交史の専門的立場から研究指導を受けた。研究テーマとSOASでの研究計画について面談の時間を頂いた際に、8月の口頭発表とその後の

調査の過程で、研究テーマを深めるためには研究対象を広げる必要を感じ、これまでトルコで調査してきたイスラーム団体の関係者以外に、トルコで言論活動を行っている知識人や文学者を視野に考えている旨を伝え、その対象と関連文献について非常に重要なアドバイスを得ることができた。そうした示唆を基に、近現代トルコ文学史における宗教的作品の位置付けやイスラームの表象、書き手である文学者、思想家等に関する先行研究を読み理解した上で、関連資料を調べ収集した。

本プロジェクトの提携先である SOAS の研究環境についてであるが、図書館には学術書のほか、一次資料となる現在入手困難な文献も多く所蔵されており、滞在期間中、それらをほぼ手元において活用することができた。SOAS からの受入通知書の記載の通り、図書館や院生の共同研究室にある PC は（検索用を除き）正式な SOAS 学生のための設備であるため基本的に利用できなかったものの、資料収集の点では利便性の高い研究環境で研究・勉強に取り組むことができた。

その他、派遣中にトルコおよび英国で見聞きした研究活動について若干報告する。トルコでの派遣先であるビルギ大や他大学で開かれた講演会、シンポジウムでは、欧州のイスラーム移民・市民が直面している宗教と世俗主義や民主主義、異宗教間対話といった問題に関する、当事者でもある研究者による激論を聴講する機会があった。「欧米の宗教としてのイスラーム」という視点からの議論とそれに対する反応、その臨場感を、トルコの政教関係を考える際にも生かしていければと考えている。また別の機会には、学術的シンポジウムと銘打たれていてもアカデミックな議論ではなく、特定の立場を代弁する「演説」に過ぎないと判断せざるを得ない発表があった一方、当事者としてのヴィヴィットな問題意識と論理を知ることができ勉強になった。英国では、主にトルコ人のトルコ研究者の講演を聴く機会に恵まれたが、およそ 45 分から 1 時間の講演に同等の質疑応答時間が設けられており、研究者個々人の研究の厚みとともに、熱心な聴講者との質疑応答から研究分野としての知の厚みも感じた。こうした日本以外での研究活動の現状を見聞き得たことも、視野を広げ目指すべき方向性を確認するためのよい糧になったと考えている。尚、多様な価値観を有する人々の暮らす異言語・異文化環境での日常生活には予想と対策の効かない問題も起きたが、改めて日本の状況について思いを巡らす機会にもなった。

今後は、執筆途中の論文を仕上げ、査読付き学術誌に投稿することが目前の課題である。その後、派遣先で調査・収集した文献の読解を進め、学会発表と博士論文の執筆に取り組む所存である。日本で学生として学業に専念できる時間も限られており、派遣期間以上に自己を律し派遣の成果をまとめていきたいと考えている。